

時代の変化とともに林業が衰退

第二次世界大戦後は、復興に必要な木材を確保するために、日本各地の山で木の伐採と植林が進みました。多摩地域においても、高度経済成長期（昭和30～40年代後半）にかけて多くのスギ、ヒノキが植えられました。

しかし、外国から安く大量に木材が輸入されるようになったことに加えて、次第に木材の需要が減少したため、国産木材の価格が下がって林業の担い手も少なくなりました。林業が衰退したことで、戦後に植栽された人工林の多くは、十分な手入れがされず、幹や根がしっかりと育っていないことで風雪害を受けやすいことなどが心配されています。

日本の暮らしに欠かせないスギ

大型のノコギリがなかった時代、ほとんどの板は割って作られました。スギの幹はまっすぐに育つ性質を持ち、縦方向に割りやすいだけでなく、厚さ5ミリ程度まで薄く割ることができます。柱などの建築用材だけではなく、幅広く薄い板材もとれたため、スギは様々な用途に使われました。

例えば、桶や樽などの器に使われました。大きなものでは、人の背丈よりも高い3,600L入りのスギの酒樽もありました。スギは酒樽、味噌樽、醤油樽など、日本食の基礎になる調味料の生産に欠かせない材料だったのです。現在も多くの住宅等に使われ、人々の暮らしを支えています。



考えてみよう! これからの東京の森林

豊かな森林は、飲み水の確保や土砂災害の防止に不可欠です。また、スギやヒノキは、若くて成長が盛んな時期に、地球温暖化の原因となる二酸化炭素をたくさん吸収します。十分に育ったスギ等を伐採して、柱などとして使い、新たな木を植えて育てていくことで、森林は二酸化炭素を多く吸収し続けます。

東京の森林の恵みである木材を、身の回りで積極的に使うことは、私たちや次の世代の豊かな生活を守っていくことにつながるのです。



植樹の体験イベント



「東京の木 多摩産材」を使った学校施設

【参考文献】「近世青梅林業の成立及び発展に関する歴史地理学的研究」松村安一、「四谷林業とその地理学的意義」松村安一、「杉Ⅰ ものと人間の文化史 149-Ⅰ」有岡利幸 法政大学出版局、「杉Ⅱ ものと人間の文化史 149-Ⅱ」有岡利幸 法政大学出版局、「平成25年版 森林・林業白書」

発行：東京都産業労働局農林水産部森林課 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号 電話 03-5000-7200

制作：シーアンドゼットコミュニケーション株式会社 登録番号(05)200

この紙は、東京の木25%、古紙75%を配合した東京の木の紙です。



東京の林業の歴史について知ろう



青梅林業
四谷林業

江戸時代、東京には二つの林業地がありました。

江戸時代の東京は、100万人もの人が住む大きな都市でした。江戸城の建設や、町づくりには大量の木材が必要であり、薪や炭など、生活のエネルギー源としても木は欠かせませんでした。また、江戸ではいくつもの町を焼くような大火事が度々起こり（江戸の大火）、再建のための資材も求められたため、木材の値段はとて高くなり、関西方面からも多くの木材が江戸に運ばれました。江戸ばかりでなく、各地で城や町づくりが行われて林業が盛んになりました。

そうした中で、東京には二つの林業地がありました。一つは現在の多摩地域西部の山で発達した「青梅林業」。もう一つは、現在の杉並区・練馬区・世田谷区辺りの平地で行われた「四谷林業」です。二つの林業地は、江戸の消費地に近いことをいかして、力をつけていきました。



たくさんの工夫や苦労があった昔の林業

◆機械もない時代、大きな木をどのように運んだの？

車も鉄道もない時代、青梅林業の山から伐出（伐り出すこと）した木は、多摩川を利用して下流へと運ばれました。伐った木をそのまま川に流す「管流し」により、川幅が広い箇所まで木を運び、そこで筏を組みました。さらに、その筏に「筏乗り」が乗って川を下る「筏流し」の方法で、河口の六郷（現在の羽田辺り）まで運び、そこからは船で材木商人の集まる木場（現在の江東区）に届けられました。

一方、江戸の中心部に近い四谷林業の地からは、木材は荷車で木場などに陸送されました。1894（明治27）年、石灰と木材の運搬を目的とした青梅鉄道の開通とともに、青梅林業の地でも道路の整備が進み、河川を利用した運搬は陸送に切り替えられていきました。



【御岳溪谷での筏流し（明治の終わり頃）】
河川の豊富な水量を利用し、急流を下る筏乗り

（写真提供：青梅市郷土博物館）



青梅林業地の人々は、農業、林業、筏乗りなどの仕事をして暮らした

山の林業と平地の林業

■青梅林業

多摩地域の西部の里山（生活のために利用される集落周辺の山）では江戸時代以前から焼き畑が行われ、奥山（集落から遠く人があまり立ち入らない山）には大木の天然林が広がっていました。江戸時代には地域の多くが幕府の領地となり、管理が地元まかせされたことで豊かな森林資源が大いに利用されました。江戸の町づくりのために、材木商人が人を雇って木の伐出を行うだけでなく、農民が畑や村の共有地にスギやヒノキ、コナラ、クヌギなどの植林を盛んに行うようになり、木材や木炭等の生産が発展しました。急傾斜の奥山に適した農産物があまりなかったため、植林（林業）は地元の重要な産業になったのです。



急傾斜地の奥山の森

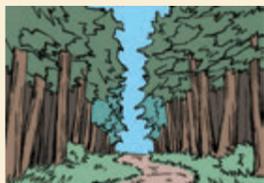


小丸太・炭・薪

■四谷林業

四谷林業は、住宅の床柱や装飾に使われる品質の高い木を生産しました。江戸時代中頃には、四谷丸太は有名な吉野丸太（現奈良県）や、北山丸太（現京都府）と並ぶ銘木（樹齢・形・大きさ・材質・見た目が優れた木）として評判を得ていました。

しかし明治20年代半ばを過ぎると周辺の都市化が進み、林業に代わって野菜の生産などが盛んになりました。また、この頃、スギの病気が猛威をふるったことも加わって、林業経営が次第に難しくなり、大正末期頃を最後に四谷林業は消滅してしまいました。



東京の平地にあった杉並木



立派な床柱

林業の今と昔を比べると……

木を育てて、伐って出荷する林業の仕事は、一般的に【植林→下刈り・つる切り・除伐*→枝打ち*→間伐*→伐採→運び出し】を繰り返します。今はチェーンソー（エンジン付きノコギリ）、ワイヤーロープ（架線）、トラックなどを使って行われますが、機械や自動車がなかった昔、どのように木を伐出していたのでしょうか？

*除伐……木の成長を妨げる雑草などを取り除く作業

*枝打ち……節が少ないなど、品質の高い木に育つよう、成長に不要な枝を切り落とす作業

*間伐……木の混み具合に応じて間引きすることで、残した木の成長を促す作業

▶今は…



【チェーンソー】
木を伐採する



【ワイヤーロープ（架線）】
伐採した木を吊り下げて、トラックなどが
入る場所まで運ぶ



【グラップル】
木をつかんでトラックなどに積んで
運ぶ

▶昔は…



【昔の林業の道具】

大鋸は、人力で板をつくるための大型で幅広いノコギリ。木挽鋸ともいう。鷹口は、丸太に鉤をひっかけて運んだり積み上げたりするための道具。

（写真提供：五日市郷土館）



【木馬引き】

山奥では「木馬道」というレール状の道をつくり、そり（木馬）に乗せた木を人力で運びだした。

（写真提供：五日市郷土館）



【木材を馬で】

山道では馬車で木材を運搬。馬は林業の大切な労働力だった。

（写真提供：檜原村郷土資料館）